

第一日曜日  
教会学校 9:00～  
主日第一礼拝 9:00～  
主日第二礼拝 10:30～

その他の日曜日  
教会学校 9:00～  
聖書を読む会 9:00～  
主日礼拝 10:30～

# 日本基督教団 麻布南部坂教会月報

2018 (平成30年) 6. 10

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276  
E-mail church@nanbuzaka.com http://www.nanbuzaka.com/

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

聖書と祈り会  
毎週水曜日 10:30～  
成人会  
第3日曜日 礼拝後  
婦人会  
第4日曜日 礼拝後  
教会附属 南部坂幼稚園

## 「光の子、昼の子だから」

(テサロニケの信徒への手紙一 [九])

牧師 松谷 祐二

### テサロニケの信徒への手紙一 第五章一～一節

兄弟たち、その時と時期についてあなたがたには書き記す必要はありません。盗人が夜やって来るように、主の日は来るということを、あなたがた自身よく知っているからです。人々が「無事だ。安全だ」と言っているそのやささに、突然、破滅が襲うのです。ちょうど妊婦に産みの苦しみがやって来ると同じで、決してそれから逃れられません。しかし、兄弟たち、あなたがたは暗闇の中にいるではありません。ですから、主の日は、盗人のように突然あなたがたを襲うことはないのです。あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです。わたしたちは、夜にも暗闇にも属していません。従って、ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいきましょう。眠る者は夜眠り、酒に酔う者は夜酔います。しかし、わたしたちは昼に属していますから、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいきましょう。神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです。主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです。ですから、あなたがたは、現にそうしているように、励まし合い、お互いの向上に心がけなさい。

(新共同訳聖書)

には、主イエスを信じて眠りについた人々がまず顧みられ、復活する。取り残されることは決してない。わたしたちは、いつまでも主イエスと共にいられるのだと。

では、その主イエスが再び来られる「主の日」とは一体いつなのか。かつて、フアリサイ派の人々もイエス様に「神の国はいつ来るのか」と尋ねたことがありました(ルカによる福音書第十七章二〇節以下)。イエス様のほうから弟子たちに、その話をされたこともありましたが(ルカ第二十二章五節以下)。その仰せによれば、その日がいづなのか、事前に知ることは誰にも許されていないのです。ただ、僕たるあなたがたは、いつ主人が帰って来てもいいように、目を覚ましていなさい、というのがイエス様の教えでした。

パウロもまた、イエス様の仰せになった通りのことを信徒たちに伝えます。「主の日」は盗人が夜やって来るように、突然来る。妊婦の陣痛のようなものだ。いつ来るか分かりようがない上に、不可避なのだ。その一方で、矛盾するようですが、「主の日は、盗人のように突然あなたがたを襲うことはない」とも言っています。「主の日」には、何ら問題とはならない、という意味です。なぜなら、主イエスを信じている兄弟たち、あなたがたは、夜や暗闇の中にはいない。光に、昼に属している。主イエスという光に照らされて、明るい真昼のように、しらふで、目を覚まして、キリスト者としての生活をしている。だから、主がいつ来られても、「ああ主よ、お待ちしておりました。よくお出でくださいました」と喜んで迎えることができる。夜に属する人のように、酔っぱらったり、眠りこけたり(注・信仰の停滞、生活の墮落の比喩です)さえしていないければ、不意をつかれて怖じまどうようなこともない。兄弟たち、あなたがたはすべて光の子、昼の子。そうでしょう。

——パウロは、そう確認しているのです。

わたしたちが「光の子、昼の子」であるなら、主イエスを信じる者であるなら、「主の日」がいづなのかは分からなくとも、実際に主が来られた

時、終わりの時に自分がどうなるかということ、前もって分かれます。「神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです」。わたしたちが「光の子、昼の子」であるなら、最後にわたしたちを待つのは、怒れる神の刑罰ではありません。その怒りを十字架の上でわたしたちの代わりに受けて、主イエスが死んでくださったからです。最後にわたしたちを待つのは、この主イエス・キリストによる救いです。

「終末」という言葉には、キリスト教の枠外では何か恐ろしいイメージがついて回ります。いや、キリスト教でも、本来は恐ろしいはずのものなのです。旧約聖書で「見よ、主の日が来る」と言えば、多くの場合、神の恐るべき裁きが下される、という意味でした。神に罰せられるべき人間にとつて、「主の日」は恐ろしい。しかし、イエス・キリストによつて罪を赦されたことを信じる者には、もはやその恐怖がありません。「主の日」は、救いの希望の日になったのです。

自分の行く道の終わりに救いが待っている。こう信じる人は、今、安心して歩を進めることができます。「目覚めていても眠っていても(生きている時も死ぬ時も)、主と共に生きる」ことができます。「キリスト者らしさ」というものを何か挙げるとすれば、一つはこの安定感でしょう。「ですから、あなたがたは、現にそうしているように、励まし合い、お互いの向上に心がけなさい」。「光の子、昼の子」たちとして、一日一日、今の時、なすべきことをなし、お互いに励まし合いながら前進する。キリスト者の生活心得は、わりとシンプルなのです。終末の救いが、主イエス・キリストのおかげで確かだからです。

宗教改革者マルティン・ルターの言葉とされてきた(近年の研究では、どうも違うというところらしいのですが)あの格言は、この境地を言い表していると言えるでしょう。

「たとえわたしが明日世界が滅びることを知ったとしても、今日なおわたしはわたしのりんごの木を植えるであろう。」

# 鎌倉散策——教会巡り

鈴木 晋

五月十九日、教会遠足として鎌倉で教会巡りをしました。参加者は八名。鎌倉駅に近い日本キリスト教団（日基）鎌倉雪ノ下教会とカトリック雪ノ下教会を訪ねました。当日は日基雪ノ下教会でコンサートとバザーが開かれることが分かりそこに合流することとなりました。

日基雪ノ下教会はルターの宗教改革四百年に当たる一九一八年に伝道教会として始まり、八四年に現会堂に改築された歴史のある教会です。教会ホールは三角の高い天井、三百席はある椅子席、そして二階にはパイプオルガンが鎮座していました。まるで西洋美術館を思わせる佇まいに圧倒されました。



鎌倉雪ノ下教会川崎公平牧師と記念撮影

コンサートは十一時に始まり一時間強。パイプオルガンによるバッハのファンタジーとフーガを始めドイツ教会音楽の大音響を堪能し、川崎公平牧師による教会設立のお話を聞き、そして四十人の大世帯による聖歌隊の合唱に魅せられました。

雪ノ下教会では伝道八十周年として自作の作詞作曲による讚美歌集がまとめられ、その中から二曲がパイプオルガンの響きと共に披露されました。

コンサートの後、バザーとランチを共にし、パイプオルガンの見学会に全員で参加しました。パイプオルガンの音を出す仕組みや音色を作るストッブという仕組み、何百本ものパイプが収納されている構造などについて、演奏を交え、三十分以上も説明を受けました。オルガニストの横に渡邊一香ちゃんが演奏台に座らせていただき、鍵盤に触らせていただく貴重な経験もありました。帰り際、牧師との全員写真を撮り、教会を後にしました。



次に若宮大路に面したカトリック雪ノ下教会を訪ねました。この教会は正面上方に聖母のモザイク画が輝く白壁の美しいモダンな教会です。一九四八年カナダからの神父の来日により設立されたそうです。中に入るとそこは静かで涼しく、数名の人がお祈りをしている、別時間が流れていました。中を一回りしました。内観はシンプルで正面の十字架と中央祭壇以外さびやかな飾りやステンドグラスはありません。目についたのは天井側面にキリスト受難の十四の場面を表す絵パネルでした。これは「十字架の道行」と呼ばれるそうです。プロテスタント教会にない静肅な雰囲気を感じました。

二箇所の教会巡りの後、強い日差しのおかげ小町通りを散策、ソフトクリームで小休止して鎌倉駅で解散しました。今回の遠足は短時間ではありましたが、参加者全員充実した半日を堪能しました

企画係から東京近郊の教会巡りを今後も続けたい、次に東京カテドラル教会を訪問したいということでした。多くの方が参加されることを望みます。

## 報告

\* 杵島節子姉のご友人から、写真集「東京の名教会さんぽ」（著者の美術家・鈴木元彦氏は、日本基督教団東京信愛教会長老）をご贈りいただきました。当教会の写真も載っております。ご覧ください。

\* 五月二十九日（火）、第七七回東京教区定期総会が開かれ、牧師と菊池役員が出席しました。通常の議案が可決されたほか、常置委員の半数が改選され、教団総会の教区選出議員が選ばれました。

## 成人会

《各部報告 五月度》

日時 五月二十日 十三時三十分～十五時  
場所 教会堂会議室  
出席者 八名  
開会祈祷 木村信太郎兄  
内容  
一、聖書論読  
ホセア書一章～七章まで二節ずつ論読  
二、内容  
・ホセア書概論  
イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエルは大預言書と言われるのに対し、ホセア書など十二の預言書は小預言書と分類される。  
ホセアはイザヤと同時代の南ユダの預言者である。その預言は殆ど北イスラエ

## 婦人会

ルに関して行われているが、新約聖書に引用されている箇所が多い。

執筆の目的  
この預言書には、ホセアとゴメル結婚を通して、偶像礼拝を続けるイスラエルに対する神の愛が、罪と裁きの預言と、その後にくる復興の預言が記されている。

三、次回 六月十七日ホセア書八章～十四章  
司会担当 菊池才知子姉  
黙祷をもって閉会した。

日時 五月二十七日 主日礼拝後  
場所 教会堂会議室  
出席者 七名  
開会祈祷 菊池才知子姉  
閉会祈祷 全員順次小祈禱  
内容  
一、聖書研究「ヨシユア記」十三～十七章  
抜粋  
十三章一～十四 ヨシユアは神の言葉に従い戦い、神がモーセに約束された通り、レビ族を除く、十一部族に土地が与えられた。  
十四章 モーセの後継者ヨシユアとモーセに仕えたカレブの章。十四～十二カレブの信仰の証しを述べた節。  
十五～一十九 ユダ族にくじで割り当てられた土地の詳細。カレブの娘アクサとオトニエルの結婚とカレブの約束。十七～二十四 ヨセフの子らマナセとエフライムがくじで与えられた以上の土地を要求し、ヨシユアがそれに応える。神の約束を信じ、神の言葉に従って生きることが目的。  
次回 六月二十四日「ヨシユア記」十八章以降。  
二、その他、教会学校回顧情報交換